

うめぼしの詩(尋常小学校教科書より)

二月三月花盛り 鶯鳴いた春の日の楽しいときも夢のうち

五月六月実がなれば 枝からふるい落とされて 近所の町へ持ち出され 何升何合量り売り

元より酸っぱいこの私 塩に漬かって辛くなり 紫蘇に染まって赤くなり

七月八月暑いころ 三日三晩の土用干し

思えば辛いことばかり それでも世のため人のため

しわが寄っても若い気で 小さい君らの仲間入り 運動会にもついて行く

ましてや戦(いくさ)のその時に 無くてはならないこの私

九月十月秋の日に モミジや楓が色づいて 里の庭には秋の声

再び仲間はおにぎりや紫蘇に巻かれて旅に出る 私はさびしく樽の中

十一、十二この月に 山には雪がちらちらと 里には木枯らし吹き荒れて

庭ではペタンペタン餅を突き 樽の中ではブルブルと 私は震えて年を越し

正月元旦年明けて 書き初め羽根つき独楽回し

家で家族が雑煮食べ 梅の姿が膨らんで

春の香りを待ちながら 私は樽の中よりおめでとう

おわり